

## 「現象学とエスノメソドロロジーの現在」について

家高 洋

本シンポジウム<sup>1</sup>の課題は「現象学者とエスノメソドロジストとの協働可能性、両者が相互に学び合える点、問題関心の異同」である。

言うまでもなく現象学には多様な展開があり、1人のコメンテータが現象学を代表することはできない。そこで、メルロ＝ポンティの思想とエスノメソドロロジーとの共通性と違いについて指摘することを主なコメントとすることにした。メルロ＝ポンティとエスノメソドロロジーの思想的な検討は（おそらく）ほとんどなされておらず、それゆえに、従来の思想的な検討<sup>2</sup>と異なる見解が生じうると考えられるからである。もちろん、メルロ＝ポンティの思想を取り上げることは「現象学の現在」には直接つながらないだろうが、このような思想的な検討は両者の思想的前提を問い直すことであり、現に行われている調査研究やその理論的基盤についての検討には何らかの現在の意義がありうるのではないかと考えた。

ところで、現象学の中でも、調査研究における現象学的なアプローチについては、エスノメソドロロジーとかなり類似しているように予想された<sup>3</sup>。そして、前田氏と浦野氏の発表は、実際にそうであり、非常にわかりやすかったと思う。

池谷氏の発表は、アンダーソンとシャロック（Anderson, & Sharrock, 2018）の「3人称現象学」についてであった。この「3人称現象学」という名称については当初やや違和感があったが、内容としてはエスノメソドロロジーの前提と基本的な枠組みの理論的な整理であり、前田氏と浦野氏の発表の理論的な前提等が的確に提示されていた。

他方、メルロ＝ポンティの思想とエスノメソドロロジーの基本的な枠組みについては共通性のみならず、違いがあるように思われた。このことを以下に記す。

両者の共通性としては、「見られてはいるが、特に注意されていない、日常的な活動の背景」を「見えるようにして記述する」（Garfinkel 1967: 37）という基本的なスタンスが挙げられる。このことは、フッサールの現象学では志向的分析に相当するであろうが（Husserl 1977[1931]: 48-52／浜渦辰二訳、2001、90-97）、メルロ＝ポンティでも同様に、顕在的に与えられている事象から多くの解明が始まり、その何らかの潜在的な事態が明らかにされるのである（Merleau-Ponty 1945: i-xvi / 竹内芳郎、小木貞孝訳、1967、1-25）。

なお、メルロ＝ポンティは、いわゆる「1人称現象学者」ではない。というのは、メルロ

<sup>1</sup> 本シンポジウムにコメンテータとしてお声掛けいただいた高艸氏、質疑応答で丁寧にお答えいただいた前田氏と池谷氏、浦野氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

<sup>2</sup> たとえば、Lynch (1993 / 水川喜文、中村和生監訳、2012) が挙げられる。

<sup>3</sup> 質的研究における現象学的なアプローチには、大きく分けて2つの立場がある。つまり、各々の経験の文脈を重視する立場と、各々の経験の文脈を脱文脈化する立場である。エスノメソドロロジーと接点が多いのは前者であり、その代表的な著作は西村 (2018[2001]) である。後者の代表的な著作としてはジオルジ (Giorgi 2009 / 吉田章宏訳、2013) が挙げられる。

＝ポンティは、その研究活動の最初期から (Merleau-Ponty 1996[1934] / 加賀野井秀一編訳、1988) 晩年にいたるまで (Merleau-Ponty 1995 / 松葉祥一、加國尚志訳、2020)、心理学等の実証科学の諸成果を批判的に取り入れながら自らの思想を築き上げているからである。自らについての自己反省だけでなく、他者たちについての観察、さらに他者たちからの自分たちについての観察もメルロ＝ポンティの思想には含まれている (Merleau-Ponty 1960: 150 / 竹内芳郎監訳、1969、193)。ここにフッサールやハイデガー、レヴィナスとは根本的に異なるメルロ＝ポンティの思想的特徴がある<sup>4</sup>。

ところで、メルロ＝ポンティは、行動（実践）について次のように述べている。

「行動（action）はその行動野に住み着いている。そのために、行動野において現れるすべてが、行動にとっては分析したり移調したりするまでもなく直接に有意味であり、行動の応答を呼び起こすのである」（Merleau-Ponty 1955: 276-277 / 滝浦静雄、木田元、田島節夫、市川浩訳、1972、276）<sup>5</sup>。

個々の行動はそれだけで独立しているのではなく、行動を取り巻くすべての事柄と関連しているのであり、このことを「行動野に住み着いている」とメルロ＝ポンティは呼ぶ。行動についてのこのようなメルロ＝ポンティの主張は、前田氏や浦野氏の論文での記述の大枠を捉えているように考えられるであろう。

他方、エスノメソドロジーとメルロ＝ポンティの思想にはいくつかの相違があるように考えられる。

実践に参加する「人びとの方法論」に着目するエスノメソドロジーの関心の対象は、お互いの実践が「説明可能 (account-able)」であること、つまり、「観察可能で報告可能」であり (Garfinkel 1967, 1)、お互いに理解可能であることである (Anderson, & Sharrock 2018: 13)。そして、実践の記述的解明における様々な理論的想定「透明性 (transparency : 明解さ)」が、エスノメソドロジーの方法論上の「厳密さ (rigor)」の鍵となると指摘されている (Anderson, & Sharrock 2018: 8)。実際に、前田氏と浦野氏の論文において、参加者の様々な実践は「観察可能で報告可能」であり、それらの解明の際の理論的な想定は明解であったと思われる。

しかし、人びとの実践を「方法」とみなすならば、そこから取り逃されてしまうような事柄があるのではないだろうか。対話についてのメルロ＝ポンティの考察を参考にしてみよう。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において次のように記している。

<sup>4</sup> 人間についての内部からの見方と、外部からの見方（歴史学や民俗学、精神病理学等の実証的な諸科学の成果）の双方を否定しないような「第三の次元」の探究がメルロ＝ポンティの基本的な問題意識であったと考えられる (Merleau-Ponty 2000[1951]: 11-13 / 松葉祥一訳、2008、9-10)。

<sup>5</sup> 本稿における引用文献の訳出に関しては必ずしも邦訳に従っていない場合がある。邦訳者の方々の訳業に対して深く感謝するとともに、ご寛恕をお願いしたい。

現に行われている対話においては、私は自分自身から解放されている。つまり、他者の考えはたしかに彼の考えであり、それを考えているのは私ではないのだが、私がそれが生まれるとすぐにそれを捉え、むしろそれに先駆けてさえいるのであるし、同様に相手の唱える異議が私から、自分が抱えていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもするのであり、このようにして、もし私が他者に様々な考えを考えさせるのだとすれば、他者もまた私に考えさせたりもするのである。

(Merleau-Ponty 1945: 407 / 竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、1974、219-220)

対話において、時として、不意に言葉が出て来ることがあるし、また相手の言葉を先取りすることもある。また、相手もこちらの言葉を先取りしつつ、相手自身が思ってもみなかった言葉を発することもある。

このように、実践が生じているときには、自分自身が意図していないような偶然事が生じうると考えられる。もしそうであるならば、意図していないような発話等の実践を「方法」と呼ぶことは適切であるのだろうか。というのは、多くの場合、「方法」とは、何らかの目的を持って様々な事象に意図的にアプローチする合理的な主体的存在を前提とすると考えられるからである。

さらに、この対話の例において自分と相手は、協働を意図する以前にすでにお互いに働きかけあっているということも生じている。自分の発話と相手の発話についてメルロ＝ポンティは「われわれのどちらが創始者だともいうわけでない共同作業に組み込まれているのである。そこにあるのは、2人がかりでつくっている1つの存在である」(Merleau-Ponty 1945: 407 / 竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、1974、219) と述べている。

このことは、対話に限らず、身体的行動の協働実践にもあてはまるだろう。

たとえば、西村 (2016: 78-82) には、4人の看護師が、わっと動き始めた1人の患者を押えた事態が記されている。この時に、看護師たちは「どう対応しようかと考えたり、看護師同士で相談したりしてその行為が決められたのではなく、4人ともが動いた患者に否応なく応答して押していたことがわかる。つまり、患者の状態の判断や、自分たちがすべきことを考えること(思考)を挟み込まれずに、患者の状態に直接的に応答したこととしてその行為は語られている」(西村 2016: 79-80)。

もちろん、この状況において「患者を絶対転ばせない」という意図を看護師全員が持っていたが、この患者を「『転ばすわけにはいかない』状況にあることがわかる、そのときには既に患者を押えていたのである」(西村 2016: 80)。

つまり、ここには、明確な意図よりも先に働き、また、ともにいる別の看護師たちとも協働できるような身体性、すなわち「間身体性 (intercorporité)」(Merleau-Ponty 1960: 213. / 竹内芳郎監訳、1970、18) が働いているのである。

このことをメルロ＝ポンティは「他者の身体と私の身体は、或る1つの全体をなし、或る1つの現象の表裏となる」と述べているが (Merleau-Ponty 1945: 406. / 竹内芳郎、木田元、

宮本忠雄訳、1974、218）、このような事態に関しても「方法」と呼ぶことができるのであろうか。

以上の指摘において、エスノメソドロロジーとメルロ＝ポンティ思想との基本的な前提の違いが示されていると考えられる。

前述のように、社会的実践に関するエスノメソドロロジーの着眼点は、その実践が「観察可能で報告可能」という意味での「説明可能」ということである。さらに、理論的想定「透明性」の方法論上の重視（Anderson, & Sharrock 2018: 8）も考慮すると、Anderson, & Sharrock（2018）が主張しているように、エスノメソドロロジーは、フッサールの現象学と近い側面があるように思われる。

よく知られているようにフッサールは、「明証（Evidenz）」を重視し、明証に基づいて学を樹立しようとした。このことが現象学を1人称化する主な要因になったと考えられる。一方、エスノメソドロロジーは社会的行為の記述的解明であり、「3人称」的に実践にアプローチするが、その解明の基本的な前提には（理解可能性等の）何らかの「明証」があり、また、明示的な解明が求められている（Anderson, & Sharrock 2018: 8）。このような「明証」や「明証化」の重視においてフッサールとエスノメソドロロジーには一定の共通性があるように思われる。

それに対して、メルロ＝ポンティにとっての1人称的な経験は決して明晰ではなく、基本的に厚みがあって、曖昧さを伴っている（Merleau-Ponty 1945: 456-468. / 竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、1974、288-304）。

また、メルロ＝ポンティにとっての意識は何か拘束された意識であって、このような意識は、「自らの歴史野や世界野を通してしか自己に結びつかない意識であり、自ら自身にそのまま触れたり合致することはない意識」なのである（Merleau-Ponty 1955: 277. / 滝浦静雄、木田元、田島節夫、市川浩訳、1972、276）。

だが、メルロ＝ポンティによれば、意識とはこのように自らと完全に合致しない意識だからこそ、観念論的な構成的意識と違って、他の意識と共存しうる（Merleau-Ponty 1968: 60. / 滝浦静雄、木田元訳、1979、40）。それゆえに、このような意識の捉え方は、（前述のような）対話等での他者との協働という事態を考えるための概念的な手立てを与えているのである。

以上、「人びとの実践」を「方法」として捉えることができるかどうかということにおいてエスノメソドロロジーとメルロ＝ポンティの思想の違いが現れていると考えたが、今後、新たな接点が生じるかもしれない。

池谷氏によれば、Anderson, & Sharrock（2018）では、文書等の書かれた資料がエスノメソドロロジーの分析対象となっている。このことで思い起こされるのは、フッサールの「幾何学の起源」（Husserl 1953. / 細谷恒夫、木田元訳、1995）における文書的な存在である<sup>6</sup>。企

<sup>6</sup> 「幾何学の起源」についてメルロ＝ポンティは『知覚の現象学』以降しばしば論じているが、晩年に「幾

業において資料を通じて達成される組織の共同性と、幾何学の伝達と継承とは、明らかに異なった事態ではあるが、それらの間には何らかの共通性があるのではないだろうか。エスノメソドロジーの新たな1つの展開は、現象学へ新たな問いを投げかけているように思われる。

## 文献

- Anderson, Robert, John, & Sharrock, Wes, 2018, *Action at a Distance: Studies in the Practicalities of Executive Management*, Abingdon: Routledge.
- Garfinkel, Harold, 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Giorgi, Amadeo, 2009, *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*. Pittsburgh, PA: Duquesne University Press. (吉田章宏訳、2013、『心理学における現象学的アプローチ：理論・歴史・方法・実践』新曜社)。
- Husserl, Edmund, 1953, “Die Frage nach dem Ursprung der Geometrie als intentionallhistorisches Problem.” *Husserliana Band VI, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. The Hague: Martinus Nijhoff, 365-386. (細谷恒夫・木田元訳、1995、「幾何学の起源について」『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、490-534)。
- , 1977[1931], *Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie*, Hamburg: Felix Meiner. (浜渦辰二訳、2001、『デカルト的省察』岩波書店)。
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge: Cambridge University Press. (水川喜文・中村和生監訳、2012、『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房)。
- 前田泰樹・西村ユミ、2020、『急性期病院のエスノグラフィー：協働実践としての看護』新曜社。
- Merleau-Ponty, Maurice, 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (竹内芳郎・小木貞孝訳、1967、『知覚の現象学1』みすず書房。／竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、1974、『知覚の現象学2』みすず書房)。
- , 1955, *Les aventures de la dialectique*, Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元・田島節夫・市川浩訳、1972、『弁証法の冒険』みすず書房)。
- , 1960, *Signes*, Paris: Gallimard. (竹内芳郎監訳、1969、『シーニュ1』みすず書房。／竹内芳郎監訳、1970、『シーニュ2』みすず書房)。
- , 1968, *Résumés de cours: collège de France 1952-1960*, Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳、1979、『言語と自然—コレージュ・ドゥ・フランス講義要録』みすず書房)。
- , 1969, *La prose du monde*. Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳、1979、『世界の散文』みすず書房)。
- , 1995, *La Nature: Notes Cours du Collège de France*, Paris: Seuil. (松葉祥一・加國尚志訳、2020、『自

---

何学の起源』について詳細に註解した講義を行っている (Merleau-Ponty 1998. /加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均訳、2005)。

- 然—コレージュ・ドゥ・フランス講義ノート』みすず書房) .
- , 1996[1934], "La Nature de la perception." *Le primat de la perception*, Lagrasse: Verdier, 15-38. (加賀野井秀一編訳、1988、「知覚の本性」『知覚の本性—初期論文集』みすず書房、5-21) .
- , 1998, *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl*, Paris: Presses universitaires de France. (加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷均訳、2005、『フッサール『幾何学の起源』講義』法政大学出版局) .
- , 2000[1951], "Titres et travaux: projet d'enseignement." *Parcours deux 1951-1961*, Lagrasse: Verdier, 9-35. (松葉祥一訳、2008、「資格と業績—教育計画」『現代思想』36(16): 8-25) .
- 西村ユミ、2007、『交流する身体：〈ケア〉を捉えなおす』日本放送出版協会.
- 、2016、『看護実践の語り：言葉にならない営みを言葉にする』新曜社.
- 、2018[2001]、『語りかける身体：看護ケアの現象学』講談社.

(いえたかひろし・東北医科薬科大学)